

宣長等の短歌注釈における語法的考慮

——「久方の光のどけき……」の歌をめぐつて——

建 部 一 男

はじめに

江戸期、明和・安永という年は、本居宣長の組鏡や富士谷成章のかざし抄の稿の成つた年である。我が国の語学史の上から見ると、宣長や成章の研究に触発されて次々と語学研究書が（主として、てにをは研究、活語研究）出版され、明和以後約八十年間、弘化のころまでに、それぞれの分野における専門書が出つくした感がある。^{（注1）}

しかし、当時の語学書は独立した研究の成果として出されるものはなかつたし、又、読者の側でも「語学」という特別の研究としては受けなかつた。かざし抄や組鏡がでた明和より約三十年後に尾崎雅嘉の編で、浪華から出版された群書一覽には、語意考、和字正濫鈔、古言梯などは巻二、字書類に、又、組鏡、玉緒、かざし抄などは巻五、歌書類に分類されている。

活語研究にしても本居春庭の活用表は発刊当時、一般の理解の及ぶがたいものがあつたようである。義門は当時のことを

宣長等の短歌注釈における語法的考慮

その比は八衢のゑりまきとなれるよりまたいくらの年もつまざりし比にて其書をはいと解きえかてに人おほくとくしかりける比なりしかはその作ぬしなとこそあらめその書みてかうやうの事かつくもいひ出つはかりなる人はをさく世になかりしなり。
（活語雜誌・初篇）
（四〇一ウ）
と言つてゐる。

この様な状態から歌学などの普及とともに語学も盛んになり、三十年後になると

すてつ詞の活きといふ事にこころを用ふるともからもしにさかえつつ今はそのすちの事かける書ともこれかれと見えしらかへと……（活語雜誌・初篇）
（四ウ）
という様になつた。弘化嘉永の後、明治までは、いわば、以上八十年間の学説の徹底普及の時代であつて、出た語学書の名にもそれがうかがわれる。

この様な、明和・安永より弘化・嘉永ごろまでの時期をとらえ、この間に研究活動のもつとも大きく、又、著書の数の多かつた宣長・

春庭・義門の三者の啓蒙的な書で短歌注釈においてどのような語法的考慮がなされているかを見たい。同時にそれによつて、彼等の研究の展開のしかた、弟子たちへの継承のしかたの一端をもうかがつてみたい。資料には、後記六つの語学書に用例としてあげられているという意味で

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん(古今集、二)
 の歌を用い、その注釈と語法的考慮とを比較する。

小論のテキストは次の通りである。なお、全部木版本であるが、再版の本もあり、国語学史上のいわゆる脱稿初刊などの年とは多少ずれがある。(書名・著者・年号・西暦年の順)

- 詞玉緒(宣長・文政12・一八二九)
- 古今集遠鏡(宣長・天保三・一八四二)
- 詞通路(春庭・文政11・一八二八)
- 活語指南(義門・天保11・一八四〇)
- 右のうち遠鏡は、山崎美成頭書のものである。
- あゆひ抄(成章・安永2・一七七三)
- 助辞本義一覧(守部・天保6・一八三五)

小論では、右の六書をそれぞれ玉緒・遠鏡・通路・指南・抄・本義と略記する。

- 以下、次の順序でのべる
- 一、宣長の方法
- 二、春庭の方法
- 三、義門・その他の方法

四、まとめ

一 宣長の方法

本居宣長が係結の法則を活用とともに分類図示した「紐鏡」を脱稿したのは明和八年である。「玉緒」七巻はこの紐鏡の法則を八代集を中心とした和歌および文章を例証とした(約二千七百五十の和歌を引用)説明書である。「遠鏡」は、古今集の口語訳であり、「紐鏡」後二十三年の出版である。以上三書は「紐鏡」後十年ずつの間隔で出されている。

この間に宣長の短歌注釈の方法がどのように推移しているかを、「久方の」の歌によつて見よう。

玉緒六巻の結辞の項(第四十段「らん」)に次の記述がある。

○かなの意に通ふらん

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

右のように、第四句第五句が

「……の……らん」

となつてゐる歌を十二例あげ、いずれも歌中△の所に「何とて」を入れてその意を考えたと説く。又、「の」がなくても、末尾が「らん」という結辞だけのもので、右と同じ解釈するものも三例あげてゐる。(注2)

宣長は「久方の……」の歌を例に「らん」という結辞を多くの例から帰納的に解釈した。そして、「らん」を「の」の結辞の一とし

てあげている所に特色がある。もちろん「春の日」「秋の夜」などの「の」ではない。最初にあげた紐鏡にも（第一折……紐鏡は一枚の表である）

下の用の語に意の及ぶの[○]にて句をへだてても下へかかるなり又「君が来まされぬ」などいふがも此のに同じ……とある。

「花のちる」は眼前に見ている事実であり、この場合の「らん」を、「然るゆゑを疑へるてにをは也」と言っている。^(注3)

これは春樹頭秘抄をはじめとする中世にてをは研究を受けているといわれる。宣長はそれを係結の法則によつて説明しようとし、さらに八代集の中の歌を中心に多くの例証からその意味や用法を帰納的に論じている点に特色がある。

これは玉緒以後十年にして出た遠鏡にもあらわれている。遠鏡は玉緒とは目的も方法も異なる立場で書かれた本であつて、古今集の短歌全部を初学者にも理解し易いように口語で訳したものである。宣長にとつても、又、この種の本としても最初の書であらう。

当時は、松坂・京都はいうにおよばず、各地で宣長等の説を聞かんとした人が多くなりつつあつた。^(注4)直接口述しているのと同じ表現の訳文が出版の形で出された原因もここにあつたのであらう。この端書に書かれた宣長の口語訳の態度を要約すると、

A 口語について、

京都を中心とする地域の俗語を中心に使う。あまりにも俗な語や一時的な流行語と思われるものはさける。男より女の語に歌の趣をよくうつす語がある。

宣長等の短歌注釈における語法的考慮

B 訳語について

俗語にすぐ訳せないものは二三の俗語をかきねて用いる。Cにてをはについて

てにをはを言い変えたり添えたり省いたりしなければならぬ歌もある。倒置省略を注意する。係結の辞は、その意味を無視しない。むしろ重視する。ぞ・ん・らん・らし・かな・けり等の訳す上での意味を明示する（端書の約四十％は辞の個別的具體的な意味の解説である。）

D 枕詞・序について

これは訳さない。その趣を語釈の中に生かす。^{(A、遠鏡はしがき三〇ウ、B、同五}

オ、C、同五ウ、六オ六ウ十二ウ、D、同十二ウ)

などとあり、古今集の序からはじまる大胆な口語訳は、実はその底に細かい語法的考慮がなされていることがうかわれる。

さて、遠鏡中の該当部分（巻二六オ）^(注5)

日ノ光リノノドカナユルリトシタ春ノ日ヂヤニドウイフ「デ花ハ此ヤウニサワノト心ゼワシウチルヲヤラ

「らん」について玉緒に示した通り、「そのゆゑを疑へる」という点を生かし、玉緒の△に相当する所に「ドウイフ」「デ」を入れている。この歌の訳し方の特色を順序不同で列記すると、

一 玉緒の語法的考慮を生かしている

二 「しづ心なく」を「此ヤウニサワノト心ゼワシウ」と他の数語に置きかえる

三 「久方の」という枕詞を訳の上では無視し、「日」という語にする

四 「らん」を「ドワイフ」「デ」「此ヤウニ」「ヤラ」という語で訳している

などがあげられよう。

右の様に、紐鏡における「の」の意義の決定や「らん」の意義の分類、さらに玉緒の数多くの例記から導き出された方法が、初学者対象の遠鏡にも忘れられずに生かされていることを知るのである。

これはまた、文全体の構成から各語の訳を考えようとした態度とも言えよう。

二 春庭の方法

春庭は宣長の長男である。失明後（宣長の門人太平がそのあとをついだ）もその門人の数は父より多かつたと伝えられる。^(注6)

春庭は、その著「詞八衢」において、活用の種類と活用形の数を整備し、「てにをは」との接続を同時に示した活用図を作った。宣長・成章・艮等の研究を集大成したとはいえ、これは語学史上最初の整備の行きとどいた活用表である。玉緒の紐鏡に対するごとく、この活用表一枚の証として、五十七語の活用表、千四百八十の類語、そして、その中で使用度の少ない四百二十八語については原典の一部をのせている。

八衢の書の後二十年にして通路を出した。これは動詞の自他を論じた書であるが下巻は八衢の学習法・指導法が出ている。そこで一つの方法として百十九首の短歌について次の様な記述を見る。^(この、共同学習の必要、歌の創作と歌学の関係、活用暗記のための歌などが出ている)

次の詞へのみかかる

てにをはの句をへだててかかる
上へかかる

歌意の切れ目

□□ 係結（□が係、□が結）

枕詞

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん^(通路下四ウ)

此らんは上へ何とてといふことをいれて見る格なり

歌の解釈は玉緒や遠鏡の踏襲であるが、之を視覚に訴え、記号化し、歌意の重点を記号によつて明示した点に春庭の特色がある。他の百十八首を見ると、今日でいう文節（橋本氏の）に近い単位を考えていたように思われるし、文の認定や連用修飾などの考え方もうかがわれる。□印で表わされる係結がなくて「らん」という結辞のみあることが表記されている。これは宣長の方法が発展的に伝えられた姿である。また、自分の活用研究と合わせて、構文研究のための応用的方法に展開していくプロセスの一つである。春庭自身も同著の中で、最初、ほとんど理解されることのなかった活用研究の成果をいかにして初学の人に伝えるかを考えた結果の一方法であるといっている。^(注7)

語法指導に専門的術語を濫用したり、独善的な記号や図表を使うことは当時いましめられていた。宣長も、玉緒巻一で自分の創始した用語について説明した後

すべて此書に。あるいは三転。或は結び辞。或は変格。あるいは

歎息のや。などいへるたぐひの名目は。おのが今あらたにまうけたる也。すべて物をくはしくをしへさとすには。かならず何くれの名目をたてて。事をわかつたでは。さだかにしめしがたき事おはかる有り。やむことえずして。かりにまうけつる物ぞ。かならず人の耳をおどろかさんとて。よにことなるなきことをこのみてにはあらず。ききなれずとて。なおもひとがめそ。(玉緒一・十五才)

といっている。

春庭・義門の時期になると語法研究が次第に発展し、普及し、それを目的にした書の刊行を見るに至る。こういう場合、語の分類に伴つて術語設定の機運が生ずるのは自然のなりゆきであらう。春庭は活用の種類を分類し命名したし、義門は活用形について之を考えた。^(注8) いずれにしても、春庭の、この記号を用いた歌の分析は、当時の初学者の眼には新鮮に又印象深く映じたことであらう。

三 義門その他の方法

義門は自分の命名した活用形の一、連用形^(連言と)の説明に「久方の」の歌を例にして次の如くのべる。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

用ヘタラク

日ノ光リノ長閑ニユルリトシタ日ヂヤエドウ云「デ花ハジツチリ悠々寛々トシタルシツカナ心なく散る」ヤラト云歌也

とあり、右の「なく」の所に線を引いて

連用言。初学ノ為ニイハン花ハ体言ナレドココハなくちるヘツヅク、なくナレバクハココハ連用ニテツカヘルモノゾ

宣長等の短歌注釈における語法的考慮

と説く。記号は春庭のものを参照したのであらうが春庭に比べて効果の上では徹底を欠く。口語訳は宣長より直訳的である。「何とて」を入れる点などはふれずにすましている。義門の強調しているのは「なく」は体言「花」に直接接続しているのではなくて「ちる」という用言にかかる連用形であるという説明である。その為に宣長のような口語訳をつけたら春庭のような分析をしているのである。用語の説明も平易である。

また、この後に加えて、通路式の分析も記している。(同五ウ)

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

さきの通路の分析と多少異なる所がある。

一 「春の日」を二文節にしている

二 「日に」が「しづ心なく」と「花の」にかかる

三 「の」「らん」の係結には全然ふれない

目的がちがうと同一の短歌の語法説明が別の表記法をとるのであるが、義門はわざとちがえたのかどうか明かでない。

宣長・春庭は係結に重点を置き、「全体から個へ」の見方が短歌の解釈にも及んでいる様に思う。

ここで宣長と別の立場から語法の上で「久方の」の歌を説明している富士谷成章と、宣長の説を批判的立場でとらえた橘守部との二者の方法を一瞥する。

成章は「らん」を「あゆひ抄」の中に分類し、「あゆひ抄巻五、将倫三、十三ウ、何らん」、その意義について説いている。係結びからでなくて次の様な方法である。

見えたるものと隠れたる理とを併せて詠めり。

これは又、富士谷成章全集によると（八七七べ）成章の書き入れとして「らん」を「顯」と「幽」とに分類していることから明らかである。そして、

人をみて心を知ると、木を見て花をおもふと。草を見てたねをうたがふとの三あり。と巧みに比喻を用い、

らんは人をもうけ心をもうくるあゆひ也。人をも心をもあらはしてよめるものあり。かたつかたをばふきてよめるものあり。かたひびきのうたもこれにおなし。

この最後の「らん」が「久方の」歌にあてはまる。この「らん」の意味の二分類と、その説明は重要な意味をもっているが、初学者にどれほど徹底したか。さらに（抄、四、十五オ）

末なき詞には、靡を承けて「人や見るらん」「衣や着るらん」など詠む事、中昔より見ゆ。上世にはなし。万葉には……略……中昔よりは……略……近昔ごろ……略

のように六運にもとづいて語史的に説いている点は八代集をもとにした宣長とは異なる所であり、現代では宣長より説得力があるように思う。ただ障害は術語のむづかしいことである。

「久方の」の歌については、「春の日に」の横下に「ナド」と入れ、ここで一旦きり、「散るらん」の所は「デアラウゾ」と訳をつけている。宣長とその訳は変りがない。遠鏡に先立つこと十六年である。係結に中心点を置いていないのは書の目的からみて当然であるが、「らん」そのものの精密な考えと明確な分類および、歴史的に語の変遷を見ている点はすぐれた特色であらう。

「の……らん」の係結を無視するだけでなく積極的に否定したのは橘守部である。

守部の考え方は後世音楽派といわれ、本義が宣長の玉緒に対する徹底的な批判の上から成立している。同書「の」の項に玉緒の説をとり上げ、（上、三十四オ）

用の語より受たるのといへる。これもわろし。のは既にいへるやうに。体語の下にのみ附て。用語より受る事。絶てある事なし。然るにこれらの歌に。用語より受たるは。其処に。体語を省き含めて。つづけたる故なり。

と、まず、玉緒における「の」の認め方を、はつきり否定し、次に「久方の」の歌を出し、例の所に「何トテ」とつけて「らん」に傍線をつけている。「らん」についても玉緒の説をとり上げ、（本義、八十五ウ）

のの辞の結びとせれど。のを結びたるにはあらず。そも／らん」と云て。直ぐに其事を疑へるには。上にや。何等の指辞ありて。其辞を結び。又其ゆあよしを疑へる方には、上に指辞なくて。一首の中に……略……

と言っている。なお、この「の」に係辞からとりのぞく説は守部が言い出したのであるが、現今も正しいとされているので、守部は宣長の紐鏡の一部を訂正したという事になる。^(注10)ただ、「の」という辞の最初の説明が、音義から出発している点は素直に納得できない。守部の説き方は、ややすると激越な点が見られ、ある程度歌学を修めた人には痛快であらうが、初学者にとつてはどうであらうか。^(注11)宣長、春庭などの比較的穩当な説き方に少し読みなれてくると守部

の説き方は、その効果の上から多少の疑問を持つものである。「何とて」という語を入れて考える点では以上五者同じである。

しかし、この同一の解釈は、宣長、成章、守部の三者いずれも全然異なつた根拠から出ている点は注目値すると思う。

「久方の」の歌が、明治になつて現在までどの様に説かれ伝えられて来たかについては日本文法講座・6・日本文法辞典(八二―一八四)に詳しい。

四 ま と め

「久方」の歌における「の」や「らん」などを中心にした語法的解釈を諸書に見てきたが、各論者の根本的な言語の把握のしかたが、どんな研究にも徹底していることを改めて考えさせられる。そういう点をさらに読みかえすならば宣長・春庭・義門を中心とする人々の語法研究や指導の態度は次の様にまとめられるであらう。

一、全体から個へと考える(考えさせる)

例証は数多く出し、帰納的に扱う。一文中では構文的に意をとらえ、全体から個へ、個から全体へと語法上の思考を有機的に往復させる。

二、合理的に考える(考えさせる)

あやふやな神秘感を排除する。法則をたてる時にはできるだけ多くの例証を集め、又、例外のものも見がさない。又、弟子に向つては、種々の納得のいく方法(図表・記号・比喩・例示)を考え、大いに多くの人の批判を仰ぐ様にする。平易な口語訳も合理的に考える上での大きな力である。

義門は春庭の「詞八衢」の序文の中に仮名づかいの誤のあるのを見つけ(四箇所)著者であり師でもあつた春庭に直接面談して之をたしかめた。活語雑話(上、廿八ウ)にこのことを記した後

ソモ、世エ宗匠トイハレ先生ト信ゼラルル人々ノ。コノアヤマリヲナセルガ。指シモツクスマジクイト影ダシキカウレタサヨ今ヨリノチャウノ明カニナリユカンノチノヒトニモハツヘカラスヤ

と言っている。本居家の忠臣(「日本文法史」福井久蔵)とさえ言われた篤実な学者義門にしてこのような積極的な発言のあつたことは注意しなければならぬと思う。これも「合理的に考える」という一つの態度になるであらう。

注1(イ)

以上

a 福井久蔵氏は「日本文法史」の年表一(維新以前における文法に関するもの)の中で百二十一書を列記されているが、項目別に見ると半数以上はこの八十年間である。()はその項の書の合計。

活語の部 25 (49)

てにをはの部 35 (61)

総記の部 9 (11)

b 山田孝雄「国語学史要」一八六

契沖以後わが国語学の為に上の如く種々の学者が出て種々の方面にわたり、漸次に深い考察を加うるに至つたが、しかし仮名遣の外は未だ真に学問の領域に入つたとはいえない状態に在つた。然るに、明和安永の頃、富士谷成章、本居宣長の二大学

者が並び出て、その研究を発表してから、わが国語学は一大躍進をとげた。

c 時枝誠記「国語学史」においても、全体を五期に分けた研究史に、「明和安永より江戸末期」の設定があり、この期の解説は他の四期の合計と同じ紙数を費やし、研究史の中心となっている。

注1 (ロ)

弘化以後の代表的な語学書をあげる。ただし語学書としては左の他に、蘭文典にのつとつた鶴峯戊申の語学新書(天保四・一八三三)がある位で、代表的なものがそのまますべてといつてよい。(一)内は補遺訂正の対象となつた先行の書と考えられるものである。著者はいずれも省略する。

玉緒末分節(玉緒)・てにをは係辞弁(玉緒)・紐鏡中の心(紐鏡)・挿頭鈔増補(かざし抄)・詞玉緒補遺(玉緒)・詞八衢補遺(八衢)・八衢大略(同)・八衢補翼(同)・八衢補正(同)・活語新論(指南)

注2

古三 ほとときすわれとはなしにうの花のうき世中になきわたるらん
同 八 わかれてふことは色にもあらなくにこころにしみてわびしかるらん
同十八 わが身からうき世の中となげきつつ人のためさへかなしかるらん

此のは下へかかるのにあらず

注3 富士谷成章全集上巻八八〇べー八八二べの竹岡正夫氏の解

によると遠鏡刊行以前に次の様な諸書に「久方の」の歌の説「らん」について解説が行われている由である。(著者略)

聞書(もつとも早いものは一二五五ごろ)

姉小路式(一二七五?)

耳底記(一五九九)

春樹頭秘抄(一一六一〇以前)

春樹頭秘増抄(一七三七以前)

てにをは義慣抄(一七六〇)

てには綱引鋼(一七七〇)

倭訓栞(一七七七)

また、岩波古典文学大系の「古今和歌集」における佐伯梅友氏の解説(同六九べー七五べ)によると、宣長以前に古今集に關してはすでに六十九種の諸註釈書が出ている。

注4 (義門・「活語雑話」各篇にその情勢をうかがう文が見える)

注5 遠鏡(二ノ六オーウ)頭書の註

ひさかたとは天・雨・月・みやこなどいふ冠辭也。天のかたちはまろくてうつるなるを瓠ひよこの内のまろくむなしきにたとへて瓠形ひよこがたの天といふならんとおぼゆ。久かたのひかりのどけき春の日にてふは空のひかりといはんがごとし。

成案ずるにひさかたの説は久老が万葉考に日刺方ヒサカガタの意をいへるがまさりてやうにおぼゆ

注6 (国語学辞典・九二一べ・白石大二氏)

注7 通路二ノオ

おのれ常に初学のともがらの歌を多く見るにこれかれあやまる事多ければいかでしらしめむと思ひよりけるままにいにしへの歌どもをこれかれ出して其かかるとにをはのさまを心得安かるべき様に印をつけ筋なと引て教へ論しつるなり

注8 両者の創始した用語の主要なものは次の通りである。

春庭―四種の活の図・四段の（一段の・中二段の・下二段の）

活

義門―将然言・連用言・截断言・連体言・已然言・希求言

右の二者は独創的な研究をはやく創始した富士谷成章の用語数に比して極めて少ない。

注9 コレカラドリヤト初メアケル。コレカラユクサキノ「ヲ云。

但シコレハ一端ニツキシバラク名ツケタル名目也。未然言ナド

ヤウニ云テモ可ナリ。コレハマヅ[○]サ[○]一隅[○]示[○]三隅[○]トイヘル風情ナリトシレ。花サカバト云ヘバサカサキニ云ルニテ。カノサケバト云ルハチヤントサイテスンダヲ云[○]ソ[○]レ[○]ハ[○]ニ[○]対[○]スル[○]名[○]目[○]ナリ。（指南上・三オ）

右は未然形（義門は将然言という）の説明である。

注10 これは後に萩原広道が「てにをに係辞弁」（嘉永二・一八四九）ではつきりさせた。係りがなくて連体で結ぶのを余情あるものとして説明した。

注11 「らん」についての自説をのべ、続いて、これらをかなの意とせる。其積の迂遠なるのみならずさやうに解では、例の本意に疎くなりて、いよよ字びの妨げとも、なりゆきなんものをや。

（これなどまだおだやかな表現のうちにはいる。）